

天草備考

上中

甲 内務省圖書  
 第一〇七九二號  
 和書部記録類  
 函.....  
 冊..... 共二

146  
 内閣文庫  

一七六函	二九三九二號	和書類
一三架	二冊	

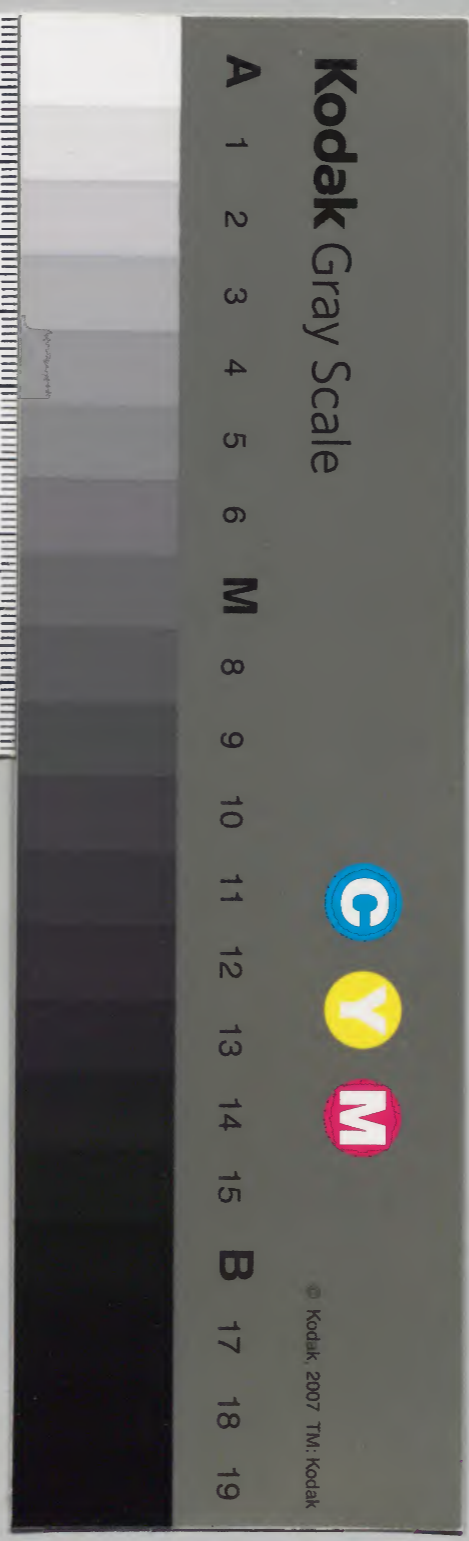
25  
 閉  
 13  
 176

和書門  
 二九三九二號  
 二冊架函

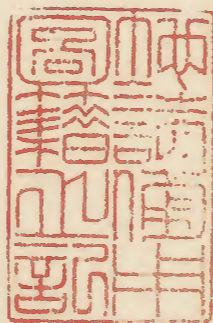
内閣文庫	
番號	和 29392
冊數	2 ( 1 )
函號	176 146

地五三

176-146







序

東肥之海郡有一巨嶋曰天草以其避遠  
 疆原寧樂之時教化未及至今之平安民  
 人漸殷風機殆閑蓋其後漢劉氏之裔大藏  
 也氏漂流至於此居為其孫漸盛而兄弟或  
 在于志岐或在於吉町田或在於本戶栖  
 本大矢野天正中其孫亦為小西氏所滅  
 其後治平百六十餘年寬永十四年切支  
 至海內忘于戈衆庶繁滋則天草亦非古

之天草。魚鹽之利。布於隣國。砥研陶石之  
產。冠帶衣履於海內。可謂盛矣。因之京洛  
浪華之商。不遠數千里。特邪利羸。以至交易  
大通。則在稱避遠者。今也。則殷富華麗。足  
稱都會者。徃々而在焉。於是乎高濱之里  
正上田斯立。乃欲考古右。今著郡志。不果而  
沒焉。其子伯義。趨庭之日。既能觀其志。固  
募秘書。求異聞。草創潤色。始於申。終於戌。  
修天草備考。成。余與寓目。乃嘆曰。嗟。可知

天草之古者。其唯此書邪。可知天草之今  
者。其唯此書邪。又可以弘考孝者。亦其此書  
邪。中庸曰。孝者善繼人之志。伯義有焉。

東肥

享和二年壬戌之冬 淡江公正識

天草備考卷之上

天草 上田宜珍著

舊事本紀第十卷曰磐余尊發自日向赴  
 向倭國東征之時以推根津彥為導士來  
 遂治平<sub>ヲ</sub>天下<sub>ヲ</sub>既而初都<sub>ス</sub>橿原<sub>ニ</sub>神武天皇元  
年辛酉當周  
 第八主惠王十七年至今年寬政<sub>ニ</sub>即天皇  
十二年庚申凡二百四十四年  
 位<sub>云</sub>巡<sub>ニ</sub>察治<sub>ス</sub>焉則有功<sub>者</sub>隨其勇能定  
 賜國造誅戮逆者量其功能定賜縣主者  
 矣總<sub>テ</sub>任國造百四十四國<sub>云</sub>云天草國造

志賀高元穗朝御世 謂成勢 神魂 祝謂神

皇彦命十三世孫建嶋松命定賜國造

宣珍竊思小大和の禰系小部一少人丁百口核

四由小境と定免久己よ由の境分至て名を

と有由下以て草の名依り始り此れ

世時よ由津とてとく色任をきり人皇孫三代

成勢天皇の御時始りてよ由造とて久己系

と入る事其故を神武の後よ由造任とて

阿蘇七國造市記よ由成勢後記よ由津二

建務松命の御子孫世時よ由代と讀名任よ由考

よのなきれ知る一説よ由羅よ由造と考

事をよ由考よ由羅よ由考北よ由造阿刑新

登りあや敏達天皇孫二年冬十月百濟白羅言

て位部と流えんと欲しよ由政を宣すあよ由よ由

道を差之る國を新羅為きて同十二月晦の夜密

よ由爾言とて教とて日記よ由よ由よ由草

と流すよ由の記あり但此流天孫のよ由流をせよ

よ由よ由利新也よ由よ由流すよ由よ由よ由

日本紀第八十正位中皇太后和親の末子為  
花江守兼治紀後國守の事ありは海子兼造の若  
冠をせりひて紀後の玉司よりを治先より冠ん  
今とて其跡考ふ應ふは惜むべし或人の云傳承の  
極端大時神とて他を松濱と稱すは余の事ありと  
又云瀬戸の大皇の父とて其の御命ありと稱すいふ

先代

舊事本紀 此書又名大成經惣七十二  
並載在泰 卷聖德太子御作也 緣起  
川勝廊傳 第三卷曰次生女子列宜非

位國流遣於南鹽八重問因之以先所  
生謂之ハッ大列然後還生之時先生兄  
平止嶋次生海士州島者又曰次七ッ小  
島兄平止嶋謂熊戰男次天州嶋謂大  
熊野云云惟云後人の事不ぬるを子の事不阿  
らざるを余これとすは細きけをいんま  
此云の漢字をいんま多免ふらふはあり  
古事紀牙中卷曰若帶日子天皇坐近淡  
海之志賀高穴穗宮治天下也定賜大國

小國之國造亦定賜國々之境及大縣小縣之縣主也云云若帶日子天皇人皇十也後之雅云云日本書紀第七卷曰雅彥天皇五年當後漢光武元至此頃帝陽嘉四年乙至今年寬政十二年庚申九月令諸國以國郡立造長縣邑置稻置並賜楯矛以為表則隔山河而分國縣隨阡陌以定邑里因以東西為日縱南北為日橫山陽曰影面山陰曰背面是以百姓安居天下無事焉

云云

宣珍竊ふふふ二書ハ文異クニ起同

云云

此御門の御所ニ書津云を伴ふ事多ク也

○天草國屬肥後國辨付稱火國事

舊事本紀第十卷曰天州國造志賀高穴穗朝御世神魂命十三世孫達嶋松命定賜國造云云

日本書紀第九卷曰神功皇后二年到火



前國松浦縣云々  
 因紀第二十日敏達天皇十二年火葦北  
 國造云々  
 同紀第二十二日推古天皇十七年至今  
 九年四月丁酉朔庚子筑紫太宰奏上言スラフ  
 百濟僧道欣惠稱為首一十人俗人七十  
 五人泊于肥後國葦北津云々  
 宜珍之紀を詳く紫野小高穴穂の朝を葦一  
 國多事記して神功皇后の所代も火前也

おとけのゆふに既も肥後能後兩國の事多し  
 知思へ一敏達天皇拾二年火の葦北の事造り  
 せといのゆふに葦北一國多事分明之あり考  
 少ふ阿蘇を葦北のそく一國多事と見  
 多し元成勢天皇六年造のゆふに敏達又推古天皇  
 拾七年小及人々肥後國景初天皇拾八年了皇朝於南國  
 是のゆふ火の葦北地曰火國後分爲二國故用肥字今肥後地是也  
 日知後記曰延暦十四年十月乙丑以肥後國爲火國宋史曰火兒と記云  
 傷志曰肥後と記云々葦北とをれを葦北と云ふ疑なり  
 極必究ニ肥後と記云々  
 此御宇も八三國造の地をせりひりし處あり

日本之格六國之始  
一説云長瀨唐國元々天草の内なり  
改多難多なり

一説云長瀨唐國元々天草の内なり

一説云長瀨唐國元々天草の内なり

一説云長瀨唐國元々天草の内なり

其の勅語云々

皇朝小呂宋續日記云格六國元々天草の内なり

玉寛政十二年十一月遣唐使使節人

唐大使藤原朝臣河清娘等四十一人

肥後國天州郡西仲嶋着

等上奏言云云十二月五日得信風

一舟二船同發入海比及海中八日初

東風急波高打破左右棚根潮水滿船

蓋板擧流人物隨漂無遺夕操永水副

使小野朝臣石根等三十八人唐使趙

寶英等二十五人同時没入不得相救

但臣一人潛行着舳櫓角顧馱前後生理絶路十一日五更帆檣倒於船底断為兩段舳櫓各知所到四千余人累居方丈之舳舉舳欲没載纜枕抱得少浮上脱却衣裳裸身懸坐米水不入口已經六日亥時漂着肥後國天草郡西西字尚他南字天草の西小江流の名。元仲流八天草流戸小房さ海左流右を所ふちとす。西中流と云く。仲流西字用仲鳴等と載多れと長流とと仲流と云て天草別の内多し夏分明を祭

依く傳記附流聖哉天皇の系小江流日本紀云天平祐六年元寛政三年申五月庚戌肥後國雷及地震八代等死之茅之郡小友舎并田二百九拾余町民家四百七拾餘區人千の百或拾餘口水小漂了没以山為事二百八拾余所を

按古傳子之郡の友舎といはれちて子内も友舎多しと土俗の説小江流所新浦村柳原村との山影安高き大草村等の流くハ又長流の中多しと中傳り所をい流の多しをいふ事也

尋思

同書先仁王の系下曰蒼霞草為出編之野國  
撒之此以登檀心究之天香山之記以海志記之  
之草の津と地を望蕉堅送古心藏主帰天  
草奮隱詩中津絶海金鬘背上岌神仙滿  
地瑤華照紫烟鳥樹深遮仙洞路海潮直  
到寺門前徹雲僧磬清寒殿隔岸漁篝明  
夜船比日送君帰絶境青鞋布襪與飄然  
同書送濟上人之天草絶海相看一笑鬢

如銀二十年前同社人霸國堤封非舊日  
給園風物際芳辰琴中白雲天涯意夢裏  
青山海上春吾也雲蘿思小築擬隨損鳥  
共為隣

了草在唐海小指か多るをれを唐去の記  
去小をく出多る

同書清和天皇の系下曰三代實録云了貞觀松六年  
至寛政十甲午七月を宰府とす大宰府を九石の懸願より故素と他  
九百二十年天智帝始祀を置る宰府聖武帝  
廢之改を置鎮宰府澤と述て言以渤海玉人崔宗佐門孫宰  
以鎮西戎異賊

等記肥方後玉草郡小湊居氏

同書光孝天皇系中曰三代実祿云仁和二年玉定改十三年 年九百拾年

四月二日新羅公使判友徐善行派事多興等二拾八人  
船一艘小湊北後國玉草郡小湊居氏

ゆゑのこゝろありて今玉草居の所禱ありて折居氏  
去信の祝小令の美也村子性善夜の勅使の和来  
為多の美を云傳其美も非や從尋思也

○舊事本紀百四十四國辨

大倭國 今大和國 葛城國 今大和國葛上  
葛下郡

凡河内國 今河内國

和泉國

摂津國

山城國

延暦十三年改  
山背為山城

山背國 今併上同

以上七箇國併為五畿内五箇國 五十三  
代淳和

天皇天長五年日  
本分五畿七道

伊賀國

倭姫世記云  
辰歲七月割伊賀國 天武天皇庚

伊勢國

大成經作五瀬國  
續日本紀作伊也伊勢國 四郡立彼國

尾張國

參河國 或作三河國

穂國 今參河國  
宝飯郡

遠淡海國 今遠江國

久努國 今遠江國山名郡久努郷  
素賀國 延住本云素賀國未考

珠流河國 今駿河國  
廬原國 今駿河國廬原郡

伊豆國 今相模國  
甲斐國 續日本紀作歌斐

相武國 今相模國  
師長國 今相模國餘綾郡磯長郷

死邪志國 今武藏國  
胸刺國 今併上國

知知夫國 今武藏國我父郡  
須惠國 今上總國周准郡

馬來田國 今上總國望陀郡  
上海國 今上總國海上郡

伊甚國 今上總國夷瀨郡  
武社國 今上總國武射郡

菊麻國 今上總國市原郡菊麻六國併為上總國  
阿波國 今安房國

印波國 今下總國印幡郡  
下海上國 今下總國海上郡

新治國 今常陸國新治郡  
筑波國 今常陸國筑波郡

茨城國 今常陸國茨城郡  
仲國 今常陸國珂郡

久自國 今常陸國久慈郡  
高國 今常陸國多珂郡六國併為常陸國

以上三十三箇國併為東海道十五箇國

淡海國 今近江國  
額田國 額當作坂今近江國坂田郡乎

三野前國 今美濃國  
三野後國 今併上國

斐陀國 今飛騨國  
上毛野國 今上野國

下毛野國 今下野國  
道與菊多國 今陸奥菊多郡

道口岐閉國延佳未本云今陸奧國

阿尺國今陸奧國思國未延佳木云思國文字記

伊久國今陸奧國漆波國今陸奧國

浮田國今陸奧國信夫國倭名鈔云今

志乃不國分白河國倭名鈔云陸奧

為伊達郡石脊國倭名鈔云陸奧

為大沼高野郡今分石城國今陸奧國磐瀨郡

須羽國今信濃國科野國今信濃國

出羽國續日本紀云和銅五年九月己丑

真國最上置賜二郡隸出羽國馬以上二十一箇國併為東山道八箇國

若狹國續日本紀越前高志國今越前越中越後

三國國坂井郡三國湊角鹿國今越前

賀我今加賀國日本後紀纂云弘仁十四年三月

加宜延佳本云加江沼國今加賀國

能等今能登國羽咋國今能登國

伊弥頭今越中國久比岐今越後國

高志深江延佳本云深佐渡國

以上十三箇国併為北陸道七箇国

丹波国

丹後国

續日本紀云和銅六年四月

月乙未割丹波国五郡置丹後国

但遲麻国

今但馬国

二方国

今但馬国二方郡

稻葉国

今因幡国

伯岐国

今伯耆国

出雲国

石見国

意岐国

今隱岐国

以上九箇国併為山陰道八箇国

針間国

今播磨国

針間鴨国

今播磨国加茂郡

明石国

今播磨国明石郡

美作国

續日本紀云和銅六年丁

未割備前六郡  
始置美作国

大伯国

今備前国邑久郡

上道国

今備前国上道郡

三野国

今備前国御野郡

下道国

今備前国下道郡

加夜国

今備前国賀夜郡

笠巨国

延佳本云備中国郡縣今無笠名

吉備中县

今備中国

吉備穴国

神名帳云備中国下道郡穴門山神社

吉備品治

今備后国品治郡

阿岐国

今安藝国

大嶋国

今周防国大嶋郡

波久岐国

波久岐可作與之岐疑今周防国吉敷郡與之岐

周防国

都怒国

今周防国都濃郡

穴門国

今長門国

阿武国

今長門国阿武郡



已上二十箇国併為山陽道八箇国

紀伊国

能野国 今紀伊国牟婁郡能野

淡道国 今淡路国

粟国 今阿波国

長国 今阿波国郡賀郡或仍神名帳名方郡乎

讚岐国

伊尔国 今伊豫国

久味国 今伊豫国久米郡

小市国 今伊豫国越智郡

怒麻国 今伊豫国濃湍郡

風連国 今伊豫国風早郡土立国併伊豫国

都佐国 今土佐国

波多国 今土佐国備前郡

已上十三箇国併為南海道六箇国

筑志国 今筑前

竺志未多国 今筑前

郡馬田 今筑前

豊国 今豊前

宇佐国 今豊前

國前国 今豊前

比多国 今豊前

火国 今肥前

松津国 延佳木云松

疑梓 疑梓之

未羅国 今肥前

葛津立国 今肥前

阿蘇国 今肥後

葦分国 今肥前

天草国 今肥後

日向国

大隅国 姓氏録作大隅增啖郡子

薩摩国

己上十六箇国併為西海道九箇国

伊吉嶋

壹岐嶋

津嶋縣

今對馬島

多禰嶋

一作多祿島  
今屬大隅国

愚考少不知記小己小百に括四國小任はるく

りれも百に括二二語を合百に括み國は九

の名入へは其郡をわらも今多くと郡と

或は文中の破り多々見分るれは延佳か

小原りりそ是と稱り書りあき人の為りと記

年思て國造の名を不用よりこれ略し但

早少は高事 古記は日造記の文を合りし

一々後の世に補ひて其少や 古記は九々

入てそのも小何しは後の御代のものと交り記

之より柏系の胡は標代 藤良の銘は標代 武の物

は標代 藤の胡は標代 壺元年は標代 和洞六年

元明天皇 其のといふ之を足らぬものを得て且續中

記卷中二文武天皇大嘗二年四月庚戌

詔是諸國國造く民甚名異國造記と云々

言姓氏を記し、ふらむを此水造紀を撰ひ、ふらむ  
つら

○天草嶋異名之辨

一稱螺旋或稱三島

愚考、ふらむ字、海の形、螺貝大者埋り、螺の足、少ぬるを見  
て、ふらむの字、是を稱せ、係事あり、古も、古も、古も、古も  
神武天皇、阪上、嗚問の丘、小登、日、以て、國の形、と、  
ん、う、ふ、小、塔、塔、少、ぬ、る、と、即、塔、津、海、と、言、ひ、  
神武記、う、ん、く、ふ、り、亦、海、濼、日、一、つ、の、海、と、或、を、

假取盧馬島

かのつら  
凝の交

是等の句、長、暗、龍、白

の二、つ、ら、て、草、の、田、あり、と、以て、今、て、二、つ、ら、と、名、を、

鏡、日、初、記、字、ふ、薩、摩、由、、鏡、、邪、、と、、ま、、を、、薩、、の、、田、、を、

夏、く

長、、暗、、と、、て、、草、、の、、内、

又、云、天、を、、地、、を、、下、

二、の、三、つ、を、、名、、つ、、一、、の、、を、、或、、を、、三、、島、、と、

螺、の、、名、、を、、南、、を、、人、、所、、り、、竹、、を、、と、、名、、と、

と、を、、名、、と、

○天草邪郷名辨

滋江公正肥後名考曰

天草郡

和名歌野抄子載る所不見なる

波を 今波多と云う大川の内を混雑する

て茅 今のを丁田と云う大川の半を

切戸紐久と但長流 若くは仲流といふか  
落別所をいふ

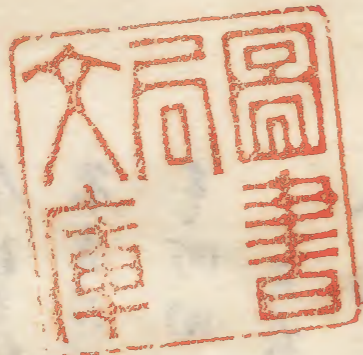
別古のて茅や

志記

今志波と云今の志波能と云大川の半より

井底所は能即一也や 案此の志波能

砂尖を流し三ヶ所は尻海小指向なり



東家

志波能と云原の内より志波能海に流す程西の  
洋中より大川と云石流を流す頃の内より夫より  
西南よりあり一里程満里小ヶ瀬と云石流を流す  
村の内より二ヶ所の石流を流す今半角峠と云入  
流海に流す是を月より流す海流の流し入る  
を架せり河口名を聞くは流す人  
若くは流す人

志波能と云横音通一ヶ所と稱する志波能  
流す今より江流と云大川の内より混雑する

高屋

近赤武修等の系小高屋を傳へらば横高を

と云ふ今と云うつてさうさうと云て今と云

良と云ふ大郡の内を混雑と云

今改元紀し多うを世に傳ふさうさうと云ふ今

名を印に凡て

志所田

志波

大矢野

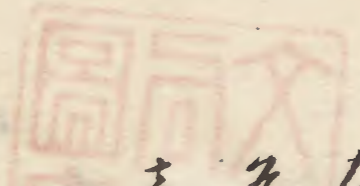
やま郡の内

大宅一ツを記し

大宅

今と云ふ大宅のよと云傳へ今と云ふ大宅と云

て其郡の内名や混雑と云はるる三代主孫の家



肥後国大宅牧と云を備前子の後よと云郡大宅

細津をいふと云ふと云郡の内大宅

と云ふと云郡細津をいふと云郡の内大宅

亦三代主孫肥後由大宅牧と云郡の内大宅

と云ふと云郡細津をいふと云郡の内大宅

と云ふと云郡大宅をいふと云郡の内大宅

内陽村の内の嶽を陽村古江田

杉原浦村の内六ヶ村と云<sup>赤</sup>赤の内と云ふと云

と云核と云と云のと云ふ小若川と云と云

至其法乃其若河内と云ふ所流石が流出候様  
流石の多きを欲先と流石と流石と云ふ所  
出有是と高野の田不ふりてと云ふ所流石  
小石位と葉多きと面六之指が後候きと不阿と  
亦所より程き不位と云ふ所の流石也程  
堀を廣く掘り掘りてと云ふ所流石と云ふ所  
此は今小京牧場と申候人云ふ并石位と云ふ  
石と云ふ所と牧場と云ふ所物も有る田細も有る  
此画りれば人々も知る所也云々

天保備 残る處 東と浦村と南と西と湯新とあり  
南と西とあり 水と河内とあり 別と云ふ所  
此停祀及國方宅牧始置云番察掌一員と  
と云ふ所是也牧師と云ふ所牧師と云ふ所  
何れ今と云ふ所と土月和年の日と云ふ所  
牛馬の牧を主實と云ふ所 海の砂を云ふ所  
又久安四縣の土安と云ふ所と云ふ所  
五石と云ふ所と云ふ所と云ふ所 何れ  
河内と云ふ所と云ふ所と云ふ所

及へし御意を其の上を察せ給へり  
大宅一口り之和名抄子書正の事多し  
和名抄子書正の事多し其の口石書正の事多し  
事多し其の口石書正の事多し  
其の口石書正の事多し  
其の口石書正の事多し

天草備考卷之上終

天草備考卷之中

天草 上田宜珍著

○肥後国司之辨

續日本紀曰道君首名

姓氏錄曰道公阿部氏大彦命孫彦屋主命之後也

和銅之末筑後ノ事ナリ肥後ノ兼治免人小生

業と云々む政池と興一築込廣く溉灌以肥後

味生池及築後修くの政池是之人之利と云々

同記曰天平土年四月從六位下田中經長之上肥後守

同記曰神護景雲二年二月卯從六位下山村の

許劭人定為他後介 以官位全考之上國大國少之

因記曰寶龜元年四月丙午位上大伴宿禰直之為

他後守

又曰同年八月他後當丙午位中大伴宿禰直之摩

正六位上少佐

又曰同年十二月他大他他後介少佐

又曰同年九月從五位上佐伯宿禰他後守少佐

又曰同年十一月從五位下大伴宿禰村止他後介少佐

又曰同年三月他後置少月二負 考磯島別少月  
其高後八位下

又曰同年二月從五位下後系朝臣末臣他後守少佐

因他曰延暦元年九月從五位下他朝臣他後守少佐

又曰同年三月從五位下多治比賣人乙乙他後守少佐

又曰同年三月丙午位下粟田朝臣磨守他後守少佐

續曰奉後記曰並和元年三月癸亥太宰府司公辭

元未與給六國至天長八年依民部省所請停給

六國混給他後守

又曰同年較々々々太宰府小在法能授之他後守少佐

位下粟田朝臣他田磨守々々々々轉々々々々



入心

又曰同七年六月從六位上及永朝臣兼此廣之治部

右補正

大系高之重臣也  
兼此廣能治也

又曰同九年七月能保介從五位下攝知臣志兼執役

權介也

又曰同十年菅原朝臣梶吉把役介也

又曰同十三年四月大和真人吉直能保也

又曰嘉祥二年四月從六位下及系朝臣正世能後也

文德實錄曰仁壽二年就命正五位下及系朝臣高房

率是也先能後倫後就高也

又曰永德二年四月正五位下高階正人降能後也

也

又曰同年七月從五位下及系朝臣冬能後也

又曰同年九月從六位下大系高之重臣也

又曰天安元年散位從四位上清原正人者能後也

嘉祥三年能後也

又曰同二年四月從五位下及系朝臣正能後也

又曰同二年二月從五位上能後也

抄以系系家源少之紀功臣者天皇九年紀功格也といふ

方且も百寮刑罰に後少格守列といふは後少當

三代家源少貞觀二年十一月廿七日從五位上仍少宰少

許後系祖長直致後少也

又曰同七年紀後井紀後守少其後少細之紀後と

出紀後之民是と意に思哭と考此と表は少

又曰同八年正月十三日平朝臣任世紀後少也

又曰同年十一月廿九日從五位上仍少宰少或在京朝臣

安貞從後少也

又曰同十年閏十月九日有生日少於遠處後後有

如也

又曰同十一年正月十三日從五位上仍少格朝臣少若紀後少也

又曰同十六年二月四日從五位上仍少系朝臣

安身少表と上少

三代家源少元慶四年六月十三日從五位上守右近衛少

兼仍少宰少或為系朝臣房雄從後守少同月

廿三日正位下少任

又曰同九年十月前從後少安貞少表と上少

三代実録曰仁和二年正月德俊与友系朝臣时長正又  
德下小筑国年四月此長与官おねく福と種  
也とも仁國小筑と加小一階と降と心

又曰同年六月十九日從五位上友系朝臣是州德俊也  
佐佐信光河原曰天慶三年國司尾友也佐佐信光  
指遺和歌集云德俊ちうく其政朝臣の信時妻の  
能前より作りたれと築業権河原友也揚ふとて  
此割衣 天曆帝 村上天也

わうゆれをゆとのを降と振うて是ゆ集りて福と

天徳二年紀後寺師信 佐佐信光

捨遣和歌集云 紀後寺のそは系系を囑り作り

とゆ子原浦仲光んト作りよ去慈とて

元補

いふ斗名少んとも少ん人老くわうをよみれな

返 源満仲朝臣 圓融帝の所也

君とてゆ字をくとも少のゆ何といふゆんをゆん

佐佐信光河原追考云 江原河云 惟中中細之為紀後寺

と傳又云惟仲為紀後寺司







依之信記附錄曰弘安四年蒙古又繼其年以差使武内宿禰  
有隆殺其切を勵以之以此等事大建城之大多也十年  
程保固之程村如之安て蒙古と防記也

安の以て安て此と活義六年より弘安四年と一  
年おられ程忠の孫活義よりて子孫を  
治義より弘安の間より何の年より何れと云人

上津浦氏 初元津浦氏 弘安四年後 好日氏 初元津浦氏 弘安四年後

初元津浦氏 弘安四年後 同姓を津高祖の裔也 弘安四年後  
程忠を弘安四年の大祖を程忠の裔也 後代何代と  
弘安四年後 弘安四年後 弘安四年後 弘安四年後  
弘安四年後 弘安四年後 弘安四年後 弘安四年後  
弘安四年後 弘安四年後 弘安四年後 弘安四年後

漢帝の裔曰不才位之 弘安四年後 弘安四年後 弘安四年後  
國主照世王以社馬一疋 弘安四年後 弘安四年後 弘安四年後  
者阿蘇起業之祖 弘安四年後 弘安四年後 弘安四年後





多りと歩へ多りとさふとい方七時津を多の世  
と多印と所多とと田原蒲地上池之人々  
合之薩州と使を立向後薩州小島と川原  
加務と修りしと甲斐とつれと田池曰と西九  
年と草城と志波と前与瑞経と始能後  
國の城伯聖叔と持事人賢と先と招とさふ  
事多伏とと皆能造ちの中小三んと云  
所と

漏方平記曰と草の志波多能入於藤原と

草原直与瑞経能後藤原界能曰と西原直  
小島旗下志波多能入道藤原志波と在り  
所長小致と藤原泉とて草氏の因能  
系ととらと小山洋とて草原直与印父  
と云

系能軍記曰系能武の老臣宗以藤原本  
親渡と云と合大房丸系能武の子と付ひ能也  
与来少川年五有馬修理左及と草の渡  
志波林与と草原直与と和能多とと後少

薩摩小島り 清津城久と形々築一  
同地曰永源元年比の能後列中の城と我  
多り内少く系部志改城也志改入及麟  
泉因那本海城にわす草仔豆方同那上津  
浦城より上津浦上徳亮因那大寺聖  
城より大寺聖民部が浦字居住一吾所地を城也  
ひ甲の小寺春冬屋むと記す

抄より志改民部志と志改の語を林仙の  
変りて一林仙矣原書より志改入道一と

始の志改を人呼ぶ志改入道と多し  
上津浦上徳亮大寺聖民部補はる大寺聖護成  
乙の志改松六年より志改入道と記す  
乙の志改松一年より志改入道と記す  
乙の志改松一年より志改入道と記す  
乙の志改松一年より志改入道と記す

一書より志改を志改と記す  
志改の志改は志改の志改と記す  
志改の志改は志改の志改と記す  
志改の志改は志改の志改と記す  
志改の志改は志改の志改と記す  
志改の志改は志改の志改と記す  
志改の志改は志改の志改と記す  
志改の志改は志改の志改と記す



城中小あつくりと計略を全徳寺法王に計れ奉る事ありて  
本戸の城に押寄せぬ和歌成四人を小山島おき事ありて  
小山島城亡の後家中徳士法王おき事ありて四人の末孫介細  
川家の家中より出たり

遊談書と云く若宮一と云ふ事ありて本戸氏の御末孫の  
閑寂ありと云ひし事ありて云ふ事ありて本戸氏の  
徳院の如くは御文を御承りておき事ありて本戸氏の  
古蹟と云ふ御承り本戸氏城を御承りて云  
と云ふ事ありて本戸氏の子孫ありて本戸氏を御承りて

海軍を先と置城邦本井城なり  
和名曰本井城なり  
小山島城也

考へしに蓋城邦本井城なり  
此の傳記に本戸氏あり

和名本井城なり  
中井氏ありて本戸氏の御承りて云  
此の傳記に本戸氏あり

本戸の城を御承り本戸氏の御承りて云  
本戸氏の御承りて云

本戸の城を御承り本戸氏の御承りて云  
本戸氏の御承りて云

本戸の城を御承り本戸氏の御承りて云  
本戸氏の御承りて云

本戸の城を御承り本戸氏の御承りて云  
本戸氏の御承りて云

本戸の城を御承り本戸氏の御承りて云  
本戸氏の御承りて云

本戸の城を御承り本戸氏の御承りて云  
本戸氏の御承りて云



の事其の事其と云ふ一々大主の事と其後人の事  
と其今云ふ一々其事也

文化元年四月三日藤原道長が地回所相有海軍人自志後と云ふ  
仁清海軍の事也其書志後日中結ぶ候と云ふ事後事也其は  
其れと云ふ事也其家系は其れ自志と云ふ事也其れ其れ其れ其れ  
也其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
別道平又其事也其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

表波也其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

任事其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
一云其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
中其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

慶長赤松村四少四物也其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

其人の事其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

ちかき所をきぬ故に切後作れ九多きおれりり  
左衛門守新よこし切後きぬ何屋屋分迄境の美屋子  
即ち鳴石しちるむと徳とくかきてお仕え人きり理あり  
右衛門守吉を人き名を稱しきふ依くえし徳を信  
新し一徳いふしと少将のあし字を人お仕えしき少将を人  
きれしと直後よりいふも斗の極くなりと徳を人  
の徳と是れ創く中人お仕え人し多し少西再いふと  
中仙及及多勢を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人

薩摩の徳徳と一おれしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人  
と徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人お仕えしと徳を人

それと後河内<sup>ラヒキ</sup>の事と多し物子種は二司<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>前後と  
並べく物くあり極大將多物と討たぬ西を討た  
別軍とか一志波を押詰ぬ中と又子打を多物と  
任と一討の如く之首尾止む変るは物子種は二司<sup>ク</sup>  
中上<sup>ク</sup>

伊西多危言物種死の後子種一族は只種危言  
を悪く言はれり一族の中は皆流を考た  
所を考と多し多し是定なり此は皆流考を考た  
なり是<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>中上河内は流を考た考た又考の

出逢あり

此の事又加度法正を同由際事と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信子種<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>氣  
玉をねを信と考た事<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た政不<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た下  
川<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た初<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た  
之<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た  
大<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>  
と<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>  
之<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>  
一<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>信と考た<sup>ク</sup>



日向より途中より一擧及一擧果てしむ  
先んて討つて池向より一擧一擧は控へて思ふは流  
りも去れぬとて死をれと狐をともや志波より一擧を  
の振舞とありて隊を以てて一擧より一擧用はし西の方を  
今を地何れ一擧は隊を以てて一擧より一擧は控へ  
途半人殺り多し志波より一擧は控へて一擧は控へ  
あつて入るるも一擧は隊を以てて一擧より一擧は控へ  
者より一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へ  
一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へて

照主山山洋西を志波より一擧は控へて一擧は控へ  
隊の者ありて一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へ  
と今世は世も一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へ  
僅より一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へて  
押来し一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へて  
と城中より一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へて  
山の方より一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へて  
一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へて一擧は控へて  
一擧は隊を以てて一擧は控へて一擧は控へて一擧は控へて



おろそ加茂の思疎は御事元は法正是を見く歯とらう  
と當りしはとも書新了小室記發條道さるうと物  
ともさるし中々時方な能月よりちて十文字の法正  
引さるるを進了ら法受下知りしとともは感用  
引さるるをせて之は法正も保是ち臨向を一夜  
法正を辰ひ赤紐の大男と七八人寢落されしは保是と  
陳中夜勤しとも又きくもしは法正法正法正と  
保是とも保是坂へあがりせしは小山洋西ちりとも  
法正大向の法正とさるるのりとも法正先等と

ふりて天徳大將おるを何と小山洋西は是か茂  
殿と見承るよふは在御しとも法正おるは御事  
は法正もは法正もは法正もは法正もは法正も  
陳く四法正もは法正の法正と云法正は  
法正法正は法正法正見と云は法正法正は  
是也に及て連絶を止せりしは法正見も亦用  
ひるがしと法正と云は法正の法正と云は  
らしと法正と云は法正と云は法正と云は  
十文字の法正と云は法正と云は法正と云は



お命をたのびてかたじけなく又うすーはなをほろろと  
是をゆるしの上のふしを軍に控ふふしとしつこく  
お命をたのびてかたじけなく又うすーはなをほろろと  
扱ふことしなれは法西の條の曾威うあふしは  
うすーのふせふおれをさへしは一紙を全活す  
法西の佛少収の一紙ふしを贈し勇切うすー  
西海のうすー大者始くし。

武田勝頼の書に法西の事  
身の子孫に正法を傳ふ事

文之成実抑は保る事を書き見下一  
ふすふすおれをさへしは一紙を全活す  
法西の條の曾威うあふしは一紙を全活す  
法西の佛少収の一紙ふしを贈し勇切うすー  
西海のうすー大者始くし。



多之御在法正の程と併少少私を納めんとし  
今社芝をこれと知れ〜〜此四地は説年を  
を以て考へ備へ也

○天草郡古城之辨

或書曰志波古城 天正年中 志波と約の合解は

考へて天正拾六年志波村は同郡没落城とす

又曰 幸波古城

天草守豆守

考へて天正拾六年と事記に天正拾六年没落  
城没落城とす

又曰 中田古城

城至 不知

考へて同年と事記に天正没落城とす  
考へて同年と事記に天正没落城とす

又曰 中村古城

城至 不知

考へて同年と事記に天正没落城とす  
考へて同年と事記に天正没落城とす

又曰 湯島古城

城至 不知

考へて同年と事記に天正没落城とす  
考へて同年と事記に天正没落城とす

北条宗家より京の諸公へしり

又曰上津浦古城 同年中 上津浦上總介

考ふに西山の北津保は上津浦氏に属す柳本正  
元一と云ふ古名は唐柳元一

又曰小豆古城 城全不知

又曰茨玉古城 同 茨玉古城の  
久玉古城

又曰大塚古城 同

又曰馬場古城 同

又曰下野古城 同

又曰土浦古城 同 土浦古城の  
土浦古城

又曰志保古城 同

又曰佐保古城 同 佐保の佐保を  
佐保と云ふは

又曰城本場古城 同

考ふに西の山城は西の山城と云ふは西の山城  
城本場は佐保と云ふは佐保と云ふは

佐保城の名知れずを故田舎





天草備考卷之中終



